こしかやの花

原人の巻

目次

華厳原人論……一
付録
辨栄上人御逸事……二六

華厳原人論

本論を華厳原人論と題するゆゑは、華厳經を宗とする故なり。同じ佛説の聖經にしても、階級として説きたるものと已に究竟として話したるものとあり。此華厳經は圓滿完全なる經なるが故に、此經を中心として、總ての經はその方便に過ずと爲。

原人とは、人生の最終根底を推究す。即ち華厳經を中心にして、儒教道教及び佛教につきて、人生及び宇宙の最終の原理を論究す。

華厳、具には大方廣佛華厳經と云。大方廣とは、如來本覺の體相用。如來の實體は宇宙の本質にして、本覺眞心體、これに無量恒河の聖德を具するを相大と云。盡十方一切の處に於て常恒に不可思議の佛事を施作す。之は體相用を證したる佛陀が普賢の萬行と、文殊の大智德によりて成就したる處、これを如來體相用、本有の法を嚴に飾りて（　）十身の佛果を成す。

原人。天地萬物の中に、人生につきて其本源を究めんとするは、論主、自己現在の身につきて、其最終の根底を尋求せんが爲め人と云。而も六凡四聖を包ね、また廣く宇宙萬有をも攝む。其故は下の文に、天地人物に於て、之が至源を原ね、我今人間に生を禀しなれども、自己の心靈はいか成る根底より生從來りしや、また、死していづれに趣向するのであるかも、自から分らぬのである。して見ればいかゞして能く廣く世界の古今の人事、時代の變遷、風俗の善惡、禮樂の成壞、刑政の得失など、すべて各國にまた人類の盛衰、或は國家または民族の時運、國の興亡などにつきても、啻に偶然の結果ではなからう。是には天の配裁と云か、また民族の共同業感とでも云か、何か其原因結果の然らしむる處が無くてはならぬだらう、なれども其原因が確めることができぬ。それが爲に、どうかその哲學的の知識を欲しい。「爲に數十年の中に、學ぶに常の師なく、博く內外を考へ、以て自身を原ね、之を原て已まず、果して其本を得たり。」

故を溫ねて新らしきを知るために、數十年間といふものは、何人と云ことを問はず偉大なる人物と聞けば、それへ尋ね、彼に問ひて、また博く孔老百子の經典より、進んでは佛教の經論について研究して、自己の理性が滿足せざれば已まず。ついに果して自己の最終の原理眞理をつきとめたり。

「然るに、今儒道を習ふものは、柢に知る、近くは則ち乃祖乃父、傳體相續して此身を受け得たり。遠くは則ち混沌一氣、剖て陰陽の二と爲り、二が天地人の三を生じ、三萬物を生ず。萬物と人と皆氣を本と爲。」

支那に行はるゝ儒と道との二教の中について、天地人の原理を研究せば、我今此身を受け得たるは、父あればなり。父には又その父と其祖先とまたその祖先と、人間の元始に遡りてその本は天地であらう。天地の本は何であらう、混沌の一氣である。即ち天地の未だ分れざるものとは、混濁の未分、陰陽未だ分れず、清濁相和するが故に一氣といふ。それより陽氣は輕く清き故に上りて、陰氣は重く濁る故に下沈し、こゝ

に天地と分れたり。陰陽二氣和合して人は其中に生じたり。是を天地人の三才と名づく。

また道教では、道は一を生じ、一二を生じ、二三を生じ、三萬物を生ず。一とは冲氣である。道が動いて冲和の妙氣を出す。それでも生物の理に於て、未だ充分でないから、また陽氣をおこしたり。陽氣ばかりでも、獨では物を生ずる事ができぬ。次に陰氣を生じ、そこで始の冲氣の一から、陽氣の二となり、次に陰氣で三と爲る。陰陽合孕して、冲氣調和して、然して後に萬物が、こゝに成ることになりしので、三が萬物を生ずとす。是道教の創世記である。次に儒教につきてみれば、易に五太あり。一に太易氣象未だ分れざる、次に太初に元氣初めて萌す。三に太始初めて形の端をなす。四に太（　）形變じて質がある。五に太極形と此より天地萬物を生ずと說くなれども、儒道二教を概して云はゞ、天地萬物と人と皆一氣を以て根底とす。

「佛法を習ふ者但云、近くは即ち前生業を造り、業に隨て報を受け、此人身を得たりと。遠くは則業又惑に從つて展轉して阿賴耶識を身の根本と爲、皆謂ふ已に其理を究むと。而も實は未だし。」佛法といふも佛教の（　）とて究竟せし說と未だ階級に在る說示したるものとあれば、何れも皆萬物の原理を究めしものと云ふべからず。階級の初步なる人天教によらば、人間と生れ來りし本は、即ち前生の業が元因として、其結果今此人に生れ得しのである。今一步進んで云はゞ、業即ち人となるべき業作は、煩惱とて人は我を執し我愛とて身量負に本つて我欲肉欲などの身につきて自然に我を愛するところから、己が情に順へば貪り、氣に逆へば忿りなど、種々の煩惱が胸中に潛みて、その煩惱につかはれて、思想と言語と行爲に於てさま〴〵のはたらきをなすので、善なり惡なり業をつめば、その業の勢力は、其種を作つて萌え茂り花さき、果を結ぶ力を有して、果を結ばざれば止まず。しかれば過去に己がまき置し因業、業の源は人々の精神にまとふて居る處の煩惱である。然れば、その煩惱は迷ひであるが、その迷ひの本は何であり、その源を遡りて推究めて見れば、法相宗などで說く處の、アラヤ識といふものである。此は人の識の大本である。この神識にはすべての性能を含蓄して、すべての心も身も世界もアラヤ識を本とすと。深淺は有るなれども、各儒にも道にも佛教の淺近の教にしても其につきて自分の宗と定めたる時には、已に全く眞理を究め盡したると謂ふて居るなれども、それより一步進んで研究する時は實はまだ〴〵である。

「然るに、孔老釋迦皆是至聖、時に隨ひ物に應じ、教を設け塗を殊にし、內外相資け共に群萌を利し、萬行を策勵し、因果の始終を明にし、萬法を推究め、生起の本末を彰はす。皆聖意なりと雖も、而も實あり權あり。二教は唯權、佛には權と實とを兼ぬ。」

然らば儒、道、權佛教の如き、未だ萬物の原理を究めずと云はゞ、其を說示したる孔子老子釋迦子は、しらざるが故に說かざるといふにあらず。何れも皆至聖にして內鑑冷然、御自身は明かに存してあるけれども、時代の然らしむる處、之れような高尙な哲學思想の發達せぬ時代に、まだ之をしりたいといふ人物もないなれば、それよりは時に直接にその人々に應じて、それに對して教を施設したるごとに、何れもその教ふる方面を異にす。孔老は先づ客觀的方面のかたちの方より倫理の道を教へ、釋迦は主觀的方面即ち人の精神の上に於て、因果の理を別し、客觀と主觀の方と、內外相資けて、共に民族及び人類を利す。今日に云はゞ、哲學あり、倫理あり。倫理の方面より聖人が人類を利するの心は（　）用し、而して道德的行爲を策進し、之れには因果、善には必ず善の報い、惡には惡の果あり、佛教に教ゆるばかり（　）、因果と云はゞ佛教に四諦十二因緣の理を明かにし、儒教に五常道德の（　）萬行とは儒道の五常道德佛の六度、八正道、十善、八定、等の萬行を策勵し、因果の始終とは、佛教にて修因を始とし、感果を終とし、儒道には氣を本とし、佛教には業また惑またアラヤ識また眞如を本とすなど同じからず。そうして萬法を推究めて萬物の生起の本末を彰はす事は皆何れも聖人の聖意より出でたるのではあるなれども、これには實あり、權あり。實は聖人の思召のまゝ權は事宜に隨つて配量して授くるので、實とは果の核、二教は權に

して、佛教のうちに始め、階級として說たるものは權である。哲學としての萬物の原則を推究する方には、權實あるとしても、倫理としては何れも、「策萬行、惡を懲し、善を勸めて、同じく治に歸するとは、則ち三教皆遵行すべし。」

しからば、聖人の教を設けるや、實踐方面には一として無用なるものなし。儒教の三綱五常、老子の保（　）守弱、釋教の三學六道、一として人の實踐的道德の人格を高等にし圓滿なる人格を作る教にして、惡を懲し善を勸む。同じく倫理としては三教皆遵行すべし。

「萬法を推して理を究め、性を盡して本源に至ることは、則ち佛教方に決了たり。」

應用的實行的道德として、三教何れも奉遵すべきではあるなれども、解脫の宗教とし高尙な哲學としては見るべきものではない。全く解脫の宗教としても眞理を源底を盡したるは獨り佛教である。

「然るに當今の學士、各一宗を執し、」儒にしても、道にしても、唯自己の先入主を飽くまで固執して、更に進みて亦進むべき事を知らず。而して唯一宗に執し、また進みて博く研究せざるなり。

「佛を師とするものに就くに、仍を實義に迷ふ。」

儒道二教ばかりではない、佛教を學ぶものにして、やはり同じく始に淺薄な階級的の教なる、業が本であるとか、惑が源であるとかアラヤ識が根底たるとか、一方に屈執して更に進みて圓滿なる實教を信せず。

「故に天地人物に於て、之が至源を究むること能はず、」宇宙萬有の最終根底を究め盡す事できぬのである。

「余今還つて內外の教理に依つて萬法を推究、初め淺きより深きに至る、權教を習ふものに於て滯を斥ひ通せしむ。而も其本を極めしむ。後了教に依て展轉生起の義を顯示する事、偏を會して圓ならしむ。而して末に至らしめんとす。」

余は今果して道儒二教や佛教につきて普く研究して萬法の根本を推し究めしなれば

初め儒教や佛教の中に於ても淺き處より漸次に深き方に進めていたりしは、階級の下級の教を習ふものを、之れに固泥せる滯を斥けて、ます〳〵進ましめて實際に其根本を極めしめ、のちに終局の眞理を示せる了教によりて、全く生起の義を顯さんに、偏を會して圓滿ならしめ、而して末に至らしめんと。

「文に四篇あり。原人と名づく。」序論已る。

本論。「斥迷執第一。斥徧淺第二。直顯眞源第三。會通本末第四。」

一、斥迷執。儒業を習ふ者の迷執を排斥す。

「儒道の二教に說く、人畜等の類、皆是虛無大道、生成養育すと、謂く道法自然にして元氣を生じ、元氣天地を生じ、天地萬物を生ず。」

老子の意に云く、我見る一物混然として成す、古より出づ、聲に非ず、色に非ず、卓然として挺特たり。物を逐ふて移らず。萬物の中に遍して安然として坦蕩たり。衆妙之れに由て出づ。宜しく(意)之が母となるべし。故に爲に强て名づけて大道と云。

また道經に人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道法自然なり。道教にては自然の大道から元氣を生じ、これより生じたる萬物であると。

「故に愚智貴賤貧富苦樂皆天に禀く、時と命とによれり、故に死して後却て天地に歸り、其虛無に復る。」

自然元氣天命によりて出たる人類なれば貧福貴賤も天よりうけ、時と命とによりて所謂る死生命あり、富貴天にあり、死も生も富貴も天命の外でないのであるから、死ねばもとの天地に歸り、もとの元氣に復る外はない。

「然るに外教の宗旨は但身に依りて行を立るに在りて、身の元由を究竟するに在らず說く所の萬物象外を論せず。」

儒道二教は、本、修身齊家の教として學ぶべきものにして、全く哲學や解脫的宗教として學ぶべきものではない。それであるから天地人物の原則を究むべき處の道ではない。それであるから現象の外を說かない。形而上の理論はいはないのである。

「大道を指して本と爲と雖も、備さに順逆起滅染淨の因緣を明さず。」

であるから大道元氣が萬物の本根底であるとは云ふものゝ、しかればいかなる理由によりて生れ來りしので、いかに修行し悟りうると、迷ひに順へば生死に流轉し、迷に逆ふて悟るときは涅槃を得ると、また迷の因緣から染となり、悟の故に淨となるなどゝ、生死解脫の道ゆきを諦かに示さぬのは、本より儒道二敎はさやうなる宗敎とかまた哲學てふものではないからである。

「しかるに、之を習ふもの是權なることをしらず、之を執して了と爲、」のち〳〵の儒道二敎の學者たちは先聖の思ひをしらず、まげて佛敎に競はんが爲に、我敎もまた高尙なる哲學である解脫の宗敎と、斗角に謂ふて競はんとはいかに。而して權なるをしらず、之をどこまでも最終の原理なりと主張す。

「今略擧て而して之を詰らん。言ふところの萬物皆大道より生ずとならば、大道は即是生死賢愚の本、吉凶禍福の基、基本既に其常に存すれば、則ち禍亂凶愚除くべからず、福慶賢善益すべからず。何ぞ老莊の敎を用ゆるや。」

それならばいま別して問かけるがいかゞ。天地萬物悉く自然の大道から直に生ずるといふならば、その大道といふものは、死ぬも生るも賢きも愚なるも吉も凶も、大道にチャンとに基礎がきまつて存するならん。キマつて存するならば禍亂も福慶もきまつて居るのであるから、除くことも增すこともできぬものとしてみれば、何の爲に老莊の敎を用ゆるのである。惡を矯正するもなく善に進ましむるもなく、業をつとめても福利を得ぬ事ならば、全體老莊の敎は何の功能もないではないか。抑も之れに敎を設るなどは一體誤りではないか。

「又道く虎狼を育なひ桀紂を胎らしめ、顏冉を夭し、夷齊を禍はひし何ぞ尊とせんや。」

また汝が云如くに、大道から直に萬物を生ずとならば、大道元氣はなぜに虎や狼のやうな人に害を與ふるものは發育し、また夏の桀王や殷の紂王みたやうな暴虐なるものを君として人民を塗炭の苦しみにあはしめたり、そうかと云はゞまた一方には顏回

や冉有のやうなえらい道德家をわかじにさせたり、また伯夷叔齊のやうな義のかたい潔白な賢人を餓死させるやうなことにしただらう。若し之れも大道元氣のはたらきと云はゞ、でも大道は尊きものと云はれやうか。

「又言はく萬物皆是自然に生化して、因緣に非ずとならば、則ち一切因緣なき處に悉く生化すべし。謂く石が草を生ずべし、草が人を生じ、人が蓄等を生ずべし。」

道敎儒敎のやうに、道德自然とか天地自然とか、かう因果律のをきても直に發生すとならば、すべて因緣なき處に悉く生せざるものか。

「又生ずるに前後なく、起つことに早晩なかるべし。神仙丹藥に藉らず、太平賢良によらず、仁義敎習によらず、老莊周孔何ぞ敎を立てゝ軌則と爲ることを用ひんや。」

因果の規定なしに生ずるならば、秩序もなく、種子から秩序的に花さき果のることなく、自然に植物ならば忽ちに生じ忽ちに實のり、動物ならば頓に生じ頓に成人しさうなもの、何故にすべてのものは一として秩序なしに因果律をはなれて生成せぬのは何の爲であらう。

自然に何事もなるならば、汝の方の神仙に成らうとするに、丹藥を鍊り氣を服しなどして、仙術を習ふは何の爲に。なぜに直ちに自然に仙人にならぬのであらう。また儒敎でもさうではないか。天命自然ならば天下を泰平にするも賢君仁良の臣によらずとも。

論語の舜臣五人ありて天下治まるとか、また武王の節に治臣十人ありと、習もつて性を成すいまだ學ばずして自ら成るものはなしと、習は自然といふものであらうか。自然と天命のみで行はるならば、老莊周孔が敎を立て軌則と示すはむだことではないか。

「又言はく皆元氣よりして生成すとならば、則忽生の神は、未曾て習慮せず豈嬰孩にして便ち能く愛惡矯恣することを得ん。若し忽有自然にして、便ち能く念に隨つて愛惡するものと云はゞ、則五德六藝悉く能く念に隨つて解せん。何ぞ因緣を待つて學習

して成するや。」

ャョ皆元氣からして生成するならば、人の精神は生ながら、直に習はずとも、嬰の時から、自然に愛惡などの七情も、また思慮分別もできそうなもの。人の記憶でも感覺でも、すべて自然にではなく、見聞の因緣によつてできたのではなからうか。若し忽ち自然に初生の子が愛憎の念をおこすといはゞ、仁義の五德も、禮樂射御書數の六藝も、自ら獨り念に隨つて解りそうなもの。なぜに學習の因緣をまつて初めてできるのであるか。因緣相資て因果律に支配せられて成るはいかに。

「又若し生は是氣を稟て忽ちに有、死は是氣散じて忽ち無ならば、誰をか鬼神とするや。且つ世に前生を鑑達し往事を追憶する處有る。則ち知る、生前の相續にして、氣を稟て忽ち有にあらず。」

儒者たちよ、汝らは、氣聚れば生となり、氣散するを死と爲ならば、然らば氣散して斷滅して沒し去らば、鬼神などなかるべし。然るに儒家に鬼神あるを許すではないか。

易に精氣物となり、游魂變を爲す。故に鬼神の情狀を知ると。四支五體は男女構精の成す處なれば、精氣物と成ると云ひ、游魂と精氣と合して人と爲る、精氣は滅すれども游魂は滅せず、故に鬼神となるとのわけである。儒敎よ鬼神は滅せずと云ひながらまた一方には氣散して滅してしまふと云は自家撞着ではないか。之れには理論ばかりでなく、事實上に前生のことをしりしことなどが、儒者たちの記したる史傳に多く載てあるではないか。

例せば羊裕が幼にして乳母をひきて李家の門に至り、樹立の中にて金環を得て、乳母に向ふて、是は我先世李家の子たりし時、戲れて藏しおきしので、吾年七歲にして井に墮て死せしと、事本傳に出づ。

また崔咸が、前生客盧老と云もので、そのしるしが黑誌にあり。道家の人ではないか。また唐の房琯が、前世永禪師にてありしこと、道士刑和僕に語りしではないか。

その外數多前生の事どもをしるしたるもの、儒道二敎に關係ある史傳にあるではないか。

「又鬼神は靈知斷せざることを驗すときは、則ち知ぬ、死後氣散して忽ち無なるに非ることを。故に祭祀して求め禱ると典籍に文あり。」

尙書に謂く、武王疾あり、周公册書を作りて、大王王季文王に禱り、身を以て代らんと請ふ。文に維れ爾の元孫某厲虐疾に遇へり、是丕子の責が天にあらば、旦を以て某の身に代へよと云々。また禮記祭法祭義等、また宗廟社稷の靈を祭り（　）のために福を祈る等皆その（　）なり。

「況や死して蘇るもの幽途の事を說き、或は死後に妻子を感動し、怨恩を讐報すること、今古皆有るをや。」

歐陽永叔病に罹り、夢に迷途の十王といふものにあふ。問に、世人僧に飯し經を造る、亡者のために追福す、果して益ありや、答て安ぞ益なきを得んと、既に寤て病良巳と。妻子を感動すとは、晉大夫魏顆といふものゝ父武子に愛妾あり、武子疾して顆に謂て云く、我死せば妾を當に嫁すべしと。武子死して顆之を嫁するに、親族之を沮む。その故は亂世には殉死とて夫死せば妾は共に活ながら葬るのである。その後、顆が秦の將杜回と戰ふとき、老人が草を結びて以て禦くか爲に敵將杜回躓て顚る、つひに之を虜にす。その夜夢に老人曰く、余は嫁する處の婦人の父なり、君先人の治命を用う、余此を以て報ずと。

その佗之に類することまゝあるではないか。而も皆儒家などの手に成りし事ではないか。

「外難して曰、若人死して鬼とならば、則古來の鬼が悲路に塡塞し見る者あるべし、如何ぞ爾らざる。答て云く、人死して六道にゆく、必ずしも皆鬼とならず、鬼死して復人等と爲る、豈古來の積鬼常に存せん耶。」

鬼とは佛敎にては、六道の中の一なる餓鬼道なり。人と共に住するも、人と形ちを

異にし、業を異にするが故に、相互に知見すること能はず。六道に定趣なく、其業に隨て轉生することなれば、人死して必しも鬼と成るにあらず。であるから古來の積鬼いつでもきまつて存在するではない。

「且つ天地の氣は本と無知なり。人無知の氣を稟なば、安んぞ忽ち起りて知ること有ことをえんや。」

氣は分別なきものである。その氣からいかがして意識的の人を因緣なしに出來たのであらう。單一の氣からしていかにして賢愚貴賤の異り出來るであらう。

「草木も亦皆氣を稟く何ぞ知らざるや。」

同じ一氣から直に萬物と成るならば、植物の類はなぜに人のよふに意識がないのだらう。

「又言く貧富貴賤賢愚善惡吉凶禍福皆天命に由るとならば。則天の命を賦けるや、奚んぞ貧多く富少く賤多く貴少く、乃至禍は多く福は少きことあるや。」

「苟に多少の分天に在らば、天何ぞ平ならざるや。況や行なうして貴く、行を守て賤く、德なうして富み、德ありて貧しく、逆は吉に義は凶に、仁は天に、暴は壽に、乃至有道のものは喪し、無道の者は興ること有をや。」

無行もし貴きは桀紂の君たるが如く、孔子の道行も位なく、景公の富るも德なく、原憲の如き德あるものも貧しく、姦邪志を得、忠良仁にあふの類、天何ぞそれ不公平なる。

「既皆天に由らば、天乃ち不道を興して、道を喪ぼすなり。何ぞ福善益謙の賞、禍淫害盈の罰あらん。」

儒道よ、唯天命ばかりならば、書に天道は善に福し、淫に禍すと。天は善を作すものには福を以つてし、惡を作すものには禍を以てすの義である。易に天道は盈るを虧て、謙に益すと、地道は盈るを變して、謙に流ぐと、また積善の家には必ず餘慶あり積不善の家には必ず餘殃ありと、こゝは天道昭にして、禍福たがはぬことを謂ふ。

「又既に禍亂反逆皆天命によらば、則ち聖人の教を設くる、人を責めて天を責めず、物を罪して命を罪せざるは、是れ當らざるなり。然る時は詩に、亂世を刺り、書に王道を讃し、禮安上を稱し、樂に移風を號するは、豈是上天の意に奉し造化の心に順するならんや。」

若し天命に由ると云ふならば、詩書禮樂に、懲惡勸善して、人の禍を遠ざけ福に就かしめは何故ぞ。なぜなれば、禍も福も皆天命ならば、風俗を矯正せようとの詩や、樂も人道を教ゆる書や禮を以てするは、天道に逆ふではないか。全く先聖書易等の語によれば、善をなせば善を得、惡をなせば惡を得ことを明し、因果の理明らかである然れども唯一世に局て、三世因果の理を說ざるのみ。唯天命のみを執して、因果の理を說かざるにあらず。人の成し來りし原因結果と深く推究めること能はざるなり。

二、斥偏淺。佛の不了義を習ふもの。

「佛教に淺より深に之く、略して五等あり。一、人天教。二、小乘教。三、大乘法相教。四、大乘破相教。五、一乘顯性教。」

一、人天教。

「佛初心の人の爲に且らく、三世業報善惡因果を說き給ふ。謂く上品の十惡を造れば死して地獄に墮し、中品は餓鬼、下品は蓄生。」

十惡とは、身に三、殺、盜、邪淫、語に四、妄語、兩舌、惡口、綺語なり。意に 三、貪、瞋、邪見。

「故に佛且世の五常の教に類して五戒を持たしむ。三塗を免るゝことを得て人道の中に生じ、上品の十善及施戒等を修して六欲天に生じ、四禪八定を修して色界無色界の天に生ず。故に人天教と名づく。」

何れも業に本く。逆惡の業によりて倒懸即ち地獄。餓鬼的の行肉慾我慾のために餓鬼の業を以て餓鬼に生じ、蓄生的の行爲によりて蓄生に生じ、五常の人倫を全うすれば人間の行であればまた人間に生るゝ權利失ふ事なし、最も公平な天道のような公平

無私のきよき精神にて最上等の道徳行爲であれば天上に生じ、進んで精神が禪定によりて精明に鍛練し、もつともきよくなりし時は清淨なる天に生じ、禪定にて精神の鍛練に等級あれば隨つて四禪八定の天あり。

此敎によらば業を身の根本とす。この敎にては業の本はいはず。即ち力である。力といふものは精神の體なければならぬのに、此敎にては個人的業の外に心識の體あるを明さず。

「故に今之を詰つて曰く、既に造業に由て五道の身を受けば未審し誰人が業を造り誰人が報を受く。若し此眼耳手足能く業を造りなば、初死の人眼耳手足宛然たり何ぞ見聞造作せざる。若心作と言ば何者か是心なる。若し肉心と言はゞ、肉心に質あり、身内に繫る。如何ぞ速かに眼耳に入つて外の是非を辨せん。是非知らずんば、何に因つてか取捨せん。且つ心と眼耳と手足と俱に質閡をなす。豈に内外相通じ、運動應接して、同じ業緣を造ることを。若し但是喜怒愛惡身口を發動して業を造らしむと言はゞ、喜怒等の情は乍ち起き乍ち滅して自から其體なし。何を將てか主として而も業を作るや。設し此の如く別々に推尋せば、都て是我身心能く業を造るといはゞ、此身已に死して誰か苦樂の報を受く。若し死後更に身あらば、豈に今日の身心が罪を造り福を修して陀の後世の身心が苦を受樂を受けしむることあらん。此に據らば則ち福を修するものは屛甚しく、罪を造るものは幸甚し、如何ぞ神理此の如く無道なる。故に知る但此敎を習ふものは業緣を信ずといへども身の本に達せず。」

約して云はば此敎の如くに業を造る主人公がないから業……

（以下斷絶）

辨榮上人御逸事（其七）

五香　善光寺　辨誠　輯錄

○

人あり、上人に問ふて曰く

「上人――鬼門といふことはありますか――」

上人平然として曰く

「はあ、ありますヨ、」

人「デハ、私にその鬼門除けを一枚是非御願ひいたしたうございますが」

上人乃ち一紙をとりたまひて中央に墨痕あざやかに、大光明とものして與へたひまぬ。

又、他の日に

法性空寂

貯肥智與牟明王

本來無方

○

一優婆夷あり、入信暫かにしてしかも己が信仰上に於ける所見、靈感？を人々に喃々して止まず

上人相戒め玉ひて曰く

「人生れて六歳にいたらざれば言葉云ふこと能はざるが如く、汝亦七年經ざれば所見を述ぶべからず」、と。

○

上人曰く、佛敎の如きは心身一如、心即ち身を引く、と。譬へば人は人の道に直なりし故此身隨つて直立し、畜生は道に昧らくヨコサマなりしが故に其の身また横に生

る、故にこれを傍生と名づく。畜生の中にても虎狼の如きは其心強暴にして猛けかりしものゝ身を引きしにて、鳧雁の類は虚榮情慾などに休みなかりしものゝ結びしなり地獄は宇宙の眞理にさかさまなる心の生ぜるところ、故に墮獄の相は頭足居處を顚倒してマッ逆か様なり、と。

換言せば過去世の心(業)目出度して今生うけ難き人身を得つれど今生邪惡獰猛にして荒きものはやがて虎狼の身を招き、浮氣轉々として止まざる者は鴛鴦の中に生をうけ、而も逆惡遂に改まらざるものは地獄の中に身を引かざるべからず、と。

○

永年、大師講(弘法)世話人として盡力し此の因緣を以て生ける善知識に邂逅せしめ玉へと求願せられける某氏ありけるが、適々上人某處の御敎筵に咫尺して宿世の信根忽ち薫發して渴仰措かず直ちに無二の信者となられける。爾來上人亦常にこゝろおきなく種々に御物語ありき。

一日坐談の折、某氏上人に、「今後人々正しき信仰を培養相續し行かんには誰人の示導に從ふべきでありますか?」と問はれける時

上人曰く「僧侶の談を聞いてはいけませぬ、」と。

○

一傳道師あり、專心布敎以て己が使命と爲し資料を百書に涉獵し萬般に蒐集し忽々として日夜に止まざるに

上人曰、「住家丈け出來れば中の造作などは後でも良いのだ、」と。

○

上人、一日、さる居士に向つての玉へるやう

「居士とは在家と出家との中間のものである。されどかの大居士維摩詰といへども佛弟子に對つては躬ら起ちてこれに三拜したと云ふことである。

汝亦、出家を犯すことは斷じて相許るさゞる所である、」と、仰せられき。

○

一僧あり、隨分餘人にも超へて念佛精進しけれど導師發願の文を邊執して化他誘導のことを爲さず、人ありてこれを問へば即ち曰く、化他度生の如きは一にこれを他生還來に俟つ、我の如き劣機鈍根の者は只だ念佛命終して次生を期すのみ、と。

上人曰「世間ではマそんな考へを抱いて居る者もあるやうだ、が、然し一體、ソノ還來の人とは何處に居るのか、一人ぐらいは見當りそうなものだ、が」と。

○

上人曰「極樂へ隱居して晝寢するより、婆婆で汗して働らいた方が良い」との玉ひぬ

○

錢孝直先生が云く、我念臨行時有ニ其麼放他不下處ノ若說ニ世間放不下一正恐跳他不レ出ニ未免一再來一還要纏レ他則其若說ニ此身放不下一正恐撐レ他不レ脫未レ ニ再受還要痛レ他則其若說ニ心放不下一正恐斷レ他不レ盡留爲ニ種子一還要惜レ他則其若說ニ佛法放不下一正恐溺レ他不レ開執成ニ法縛一還要愛レ他則其若慮ニ根萬一迷失一則倒所レ認慧根正是命根正是八識其怕ニ迷失一一念正是執我七識分ニ別六識一正須ニ擺落淨盡一還要破ニ念他一則其至ニ於淸淨本然元明妙覺一不レ容ニ揀擇一無レ可ニ任持一直至ニ一切不レ見一法不レ存一方得ニ全現一個向日迷來帶ニ了如許種々的一來今日悟去還擬下將了那一件一去乎。(淨土晨鐘了俗九、二十一頁)と

然る則んば有想の念佛、豈還つて他物に縛せられ去らざらんや、此義如何候哉と尋ね候に

上人曰、日外之書中、錢孝直とやら臨行の時其麼放他不下の處か有る云々、禪道の符號は唐人の寢言で陳ブン漢ブンだけれどもつまりかうだらう、身にも心にも佛法にも縛りつけられては終に盡未來際成佛出來ぬ、取るもなければ捨るもない本來淸淨の佛であるから元明妙覺なり其他に揀擇すべからず敢て任持すべきものもない、一切うちすて、一法も存せざるに至らば本來の佛が現前す、本來佛であるから何にも引つけさへせざればよいものである、引きつけるから自縛で佛になれぬのであるとの謂ならん

辨榮のは前と正反對である、無想無念でなく無執無縛でなく、想ふて想ふて想ふ寸

間もはなさず、即ち彌陀を想ふて捨てぬのである。無念でなく念々彌陀を念じて暫らくも離さず、無執でなく執持名號執持して常に離れず、無縛でなく我と彌陀と縛りつけて少しも離れぬのである。彌陀に縛られて何處へ行かうとしても行くこと能はず、彌陀に縛られて居る身のつらさは寒中の寒さ凌ぎに無間地獄の溫な處へも行く事出來ず、炎暑の折からも寒地獄へ行つて見ることも出來ず、行住坐臥彌陀に縛られて寢るも起るも心に縛り付けられたる彌陀は離すこと能はざれば止むなく彌陀と共に寢ね共に起き、彌陀に縛り付けられたる身の不幸一生離るゝこと能はざるのみか此身はほとけて離されること、即ち放免の期限はあるなれども心は彌陀に縛られていやな極樂へ拘引されて往かざるを得ず。それでも習慣と云ふものは妙なもので彌陀に縛りつけたる我が心、初めは自分が彌陀を負ふて居る樣に抱いて居る樣な氣がしたけれども實は彌陀に負はれてゐたのじや、抱かれて居るのじや、自分の樣な横着な奴には持て來いである。何處へ行くにも彌陀に負はれて行くのだから樂なものである、抱かれて居るので在るから氣樂なものじや。

普は辨榮も禪宗流に獨身生活ほど氣樂なものはない、彌陀とのさくれ緣を切つて仕舞つたなら、さぞかしサツパリしてよいと思ふたこともあつたが今日に爲つて見ると左樣でない、何程の大儀な事でも彌陀の力でやつて呉れる苦があれば慰めて呉れる寢かして呉れる負つて呉れる、樂な事よ。何事でも皆共力でやつてもらふた方が實に樂である、矢張り彌陀と同棲的に家庭を造る精神生活の方が得策である。而し

お前百まで私しや九十九まで　共に白髮のはへるまで

ではない

お前無量壽で私無量壽　いつも白髮は生へはせぬ

と云ふ文句で、儀老同穴の契ではない、攝取同化の無上覺となるのである、――と

（他日一禪爺この話頭を聞きて竊かに舌を捲く）

○

上人曰「因襲的世果依屬の心を脫却して、絕對的心靈界の中に歸依安住するのが宗教である」、と。

○

上人そのむかし机前に端坐して佛畫に御筆を染めさせ玉ひける折など時々微音にて「――べんねェ――上人――、べんねェ――上人、――」と、イトゆるやかに御獨語し玉ひけるを御側らに咫尺し侍んべりし人々の聞き來らせて奇異の思ひをなせることしば〳〵ありき。

◎御逸事に就て

聞くならく眞空は空ならず、執相は眞ならず破相も亦眞に非らず。と

雙手を舉ぐれば雙手に著し一目を搖るがせば一目に執す、手と目とに末那の疑を作つてしかも自爾の中道は廓々として、あらぬ方へと流れ行く

一體逸事とか逸話とか云ふものはそれ自身單獨に存するものではなく、時に對し機に應ずる無作妙用の跡であつて、この跡を硬化し固定化してはならぬ。

故に若し一の話頭に付て之を墨守し、概念化し以て故上人の全てを識れりとする者あらば即ちこれ故上人を泥するものにして相去ること三千里、滿面の慚愧でおらねばならぬ。

是は秤に在て盤に在らず、只切に担郎が靡を認識せんことを望む。これ諸賢へ對する輯錄者衷心の願望である。

昭和二年四月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓　郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
東京市小石川區水道橋二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番